MAO　The Unknown Story

マオ――誰も知らなかった毛沢東――

ユン・チアン Jung Chang　ジョン・ハリデイ Jon Halliday

【上巻】

若かりし頃の毛沢東

毛沢東は、湖南省の故郷で過ごした少年時代に自分は貧しい農民の暮らしを見て心を痛めていた、と（後年）語っている。が、それを裏付ける証拠はない。農民に同情を示すどころか、「農民の反乱『太平天国の乱』を見事に鎮圧した曾国藩（注）を尊敬します」と書いている。

（森野注）清末の洋式軍隊の創設者で、日清戦争後の「下関講和条約」の清国代表李鴻章の上司だったことでも知られる。

中国共産党の創立

公式な党史には中国共産党の創立を 1921 年としている。毛沢東がこの第一回の創立大会に参加したことになっているのだが、実際には、1920 年に共産党の創立大会があり、陳独秀が書記長（つまり党のトップ）に選ばれたが、毛沢東は参加していない（注）。

（森野注）このように毛沢東がすべてにおいて共産党の中心となるように、中国の共産党史は捏造されていることが、この本の中でしばしば紹介されている。

なお、共産党の指導者「陳独秀」は北京大学の教授でもあったインテリである。共産党はソ連の資金援助をうけているが、陳はソ連の命令に従うことに反発して党の独自性を守ろうとした。一方、毛沢東は、そんなことには無頓着で、ソ連の資金援助によって給料をもらえるようになったことに何ら矛盾を感じることがなかった。

八一起義

1927 年に共産党の主力戦力は、江西省の省都南昌に駐屯していた二万人の部隊だけだった。この軍の指揮を任された周恩来が、8 月 1 日にモスクワの指令を受けて反乱を起こした。

（森野注）周恩来の名前が登場することになるこの事件「南昌武装蜂起」は、中国共産党がはじめて武装蜂起した記念すべき事件であった。私は三番目の大学として南昌市の「江西省師範大学」に赴任したが、市の中央部に「八一起義記念塔」がそびえ立っている。この武装蜂起は強力な軍事力の国民党に蹴散らされた。毛沢東はその反乱軍の一部を乗っ取ってから、軍隊と共に井岡山に立てこもって戦力の拡大を目指した。

彭徳懐元帥の人柄

彭徳懐は毛沢東より五歳年下で、毛沢東と同じ湖南省湘潭県出身だった。彼は後に中華人民共和国最初の国防部長（大臣）となった人物で、政権内で毛沢東を最も激しく勇敢に批判したために、じわじわと長い時間かけて苦痛に満ちた死を与えられることになった。

彭徳懐の表情豊かな目と口もとには、常に悲しみの翳りがあった。彭徳懐は貧しい者や虐げられた者たちに心を寄せていた。大多数の共産党指導者と異なり、彼は極貧の子供時代を過ごし、それが心に深い傷跡を残していた。貧しさの中で母親が死に、それからまもなく、生後六ヵ月だった一番下の弟も母乳がなくて餓死した。彭徳懐は書いている。

――ある年の正月にわたしたち一家には米一粒さえなかった。それで、わたしは二番目の弟を連れて、生まれて初めて物乞いに出た。後年将校になってから、地元の名士たちの宴会に招かれるようになった。宴席には十二、三歳になるかならないかの少女たちが男の楽しみのために用意されていた。わたしは 13 歳だという少女から、将校と寝るのを拒んだためにぽん引きの男にひどく殴られた、という話を聞いた。だから、わたしは金を払ってその少女を自由の身にしてやり、それ以後は酒宴への招待にいっさい応じなかった。自分が共産主義に惹かれたのは「貧しい者に活路を見つけてやりたいと思ったからだった」（注）。

（森野注）私は彭徳懐の中に共産主義者の原型を見る思いがする。彼の時代背景と重ね合わせながら、地主など搾取階級の打破のために戦った共産主義者の存在意義を強く認めるものである。しかも彼にとって共産主義は、書物から学んだ理論ではなくて生活実感からにじみ出た必然であったろうと思う。一方、同じ共産主義者でありながら、毛沢東がその原点を忘れていることに彼は我慢がならなくて、厳しい批判をしたのだ。そのために、彼は毛沢東からヒドイ仕打ちをうける一人ともなった。

江西省の紅軍ゆかりの都市

毛沢東は朱徳と彭徳懐の軍隊を配下の納め、更に江西省を拠点とする李文林の軍隊も策略により手に入れた（注）。江西省には、毛沢東の紅軍ゆかりの地がたくさんある。南昌、井岡山そして瑞金である（瑞金＝中華ソビエトの臨時政府の首都）。

（森野注）瑞金の中華ソビエトの臨時政府のリーダーは毛沢東であったが、この後も軍内の主導権争いでは、毛沢東への批判が絶え間なくあって、リーダーの地位に就いているわけではなかった。あるときには、次のように毛沢東は批判されている。

――毛沢東はきわめて狡猾で、利己的で、誇大妄想が著しい。同士に一方的に命令し、罪を着せるといって脅し、罪に陥れる。要するに毛沢東は革命指導者の名に値しないのみならず、ボルシェビキでもない。

このような批判がありながら、共産党のトップが朱徳・彭徳懐・周恩来などではなく、なぜ毛沢東となったのか？

それは、毛沢東に権力欲だけではなく、「国際的名声」があるかららしい。とりわけ彼はクレムリンのスターリンから絶大なる支持があった。この本には以下のような毛沢東による粛清が記述されている。

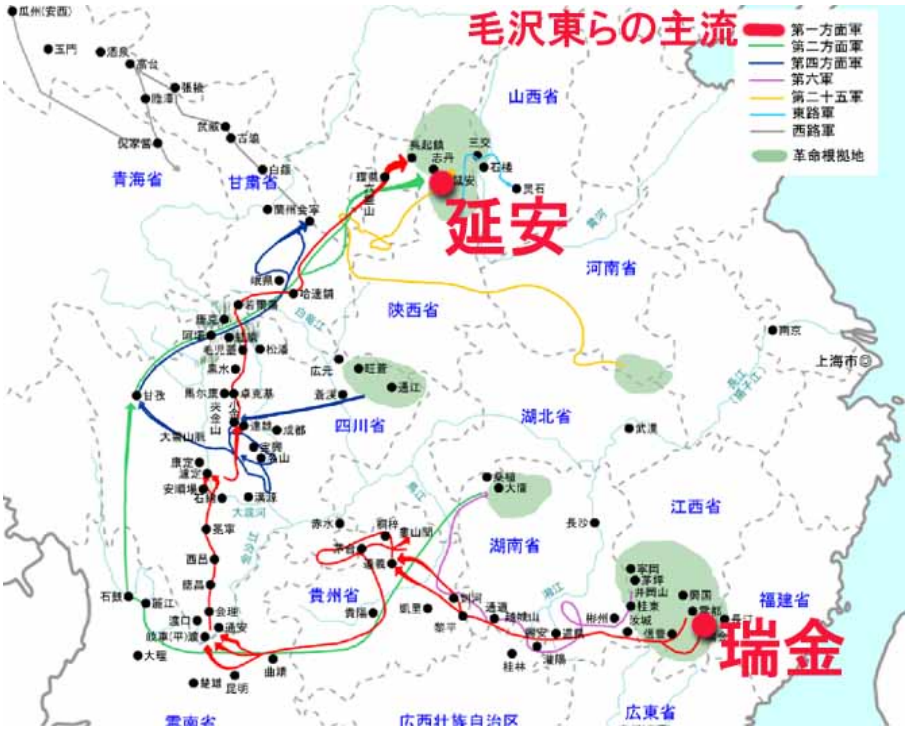
――江西省では毛沢東の策略で何万という人間が殺され、粛清直後に書かれた秘密報告書によれば軍だけで約一万人（毛沢東管轄下の紅軍の四分の一）が殺害されたという。しかし、このような粛清は、今日に至っても隠蔽されている。毛沢東の個人的な責任や動機、そして毛沢東の非情な残虐性はいまもってタブーなのである。

多くの人間を粛清で抹殺するのはスターリンの専売特許と言われているが、毛沢東もそれにひけをとらない。こんなところにも、スターリンが毛沢東へシンパシーを感じて信任が篤かったのではなかろうか。悪の枢軸が二人の間に形成されており、正に、「英雄よく英雄を知り、愛する」である！

長征

1934 年 10 月８万人が瑞金から延安までの長征（西遷）の途についた。

大量の輜重に阻まれて、西へ向かう行軍の足取りは遅かった。人夫の大多数は長征の直前に強制的に徴募された住民で、衛兵に監視されながらの行軍だった（注）。



（森野注）圧倒的な軍事力を誇る蒋介石軍が長征の途にある紅軍を攻撃すればひとたまりもなかったはずなのに、蒋介石は意図的に通過させてやった。それは、日本の中国侵略への抵抗勢力としても共産党を残して置くべきだとするクレムリンとの政治的取引があったようだ（蒋介石の息子蒋経国がモスクワの人質となっていることも一因）。しかし、蒋介石が長征の途上にある紅軍に手心を加えたことは、今日まで共産党史では秘められたままである。

毛沢東が「長征」で得た最大の収穫は、一共産党幹部に過ぎなかった身分から、長征が終わるころには紅軍の揺るぎなきトップの地位を占めるようになったことである。毛沢東は自分の野心を実現するために、卑劣な策略を巡らして自軍兵士に多大な犠牲を強いた結果、ナンバーワンにたどりついたことをこの本は生々しく伝えている。

毛沢東のインテリ嫌い（この項は私の感想）

毛沢東は都会に住む知識階級を「へりくつばかり言う役立たずだ」と考えているようだ。文化大革命のときに都市のインテリを農村に下放したのも農作業という苦役で共産主義精神を鍛え上げようとしたのだろう、と私は想像している。

毛沢東はイデオロギーの純粋性を保つという理由で、子供を含めて中国人のほぼ全員に対して重労働を日常的に課したが、毛沢東自身が肉体労働をおこなったのは、政権の座にあった全期間を通して、十三陵ダム建設の鍬入れ式でほんの数分ばかり土をすくう作業をしたときだったと、この本には皮肉たっぷりに書いてある。

そういえば、インテリ嫌いの毛沢東が自らインテリ化し、党幹部という特権階級化して本来同じ階級の仲間だったはずの農民兵を手足のように使っていたことが明らかにされた。

――共産党の苦難の時代といえば、「長征」が真っ先にあげられる。

江西省瑞金から、広東省、貴州省、雲南省、四川省（わたしが「九寨溝」へ旅行したときに、「長征記念塔」が山の上に建っていたのを思い出す）、甘粛省、そして陝西省の延安までの間、党幹部であった毛沢東は「輿」に乗せられて移動した。それを担ぐのは農民兵だ。輿を担いで急な坂道を登るときには膝小僧をすりむいて血を道に垂らしながらの苦行だったという。そのとき、毛沢東は輿に揺られながら読書三昧をしていた！　毛沢東は正規の大学教育を受けていなとはいえ、読書家であって独学による知識の豊かなところが並の共産党幹部とちがっている。

しかし、人民と苦楽を共にすべき共産党幹部が特権階級化しており、その輿を担がされた農民兵が、この本の著者のインタビューで怒りを顕わしていた。しかも後年、毛沢東は、「長征中、下士官など農民兵と共に歩き続け苦楽を共にした」と、大嘘をついているのだ。

文化大革命で真っ先に下放されるべき人は毛沢東ではなかったのか？　自分は殿上人として優雅な生活をしていながら、人民には塗炭の苦しみを強いているのが毛沢東ではないのかと疑いが湧いてくる。

もし、この著書「マオ――誰も知らなかった毛沢東――」に記述されていることがあらかた正しかったとすれば、私は、毛沢東から人間性を感じるものは100%何もないと言わざるを得ない。

西安事件

張学良

張学良は第二次国共合作を実現した立役者である。その父で満州の軍閥・張作霖は 1928 年に鉄道爆破事故で死亡している。張作霖爆殺は一般的には日本軍が実行したとされているが、ソ連情報機関の資料から最近明らかになったところによると、実際にはスターリンの命令にもとづいてナウム・エイティンゴン（のちにトロツキー暗殺に関与した人物）が計画し、日本軍の仕業に見せかけたものだという。

（森野注）わたしも、張作霖は日本軍により爆殺されたと理解している。この本の指摘が日本現代史にどのような影響があるのだろうか？　西安事件と国共合作についてこの本では、張学良の行動について一章を割いて詳述している。張学良は蒋介石を西安の「華清池」で拘束した。西安に二年いた私は、玄宗皇帝と楊貴妃のラブロマンスで有名な華清池を二度訪れ、山の中腹の蒋介石が宿泊した建物を見たことがある。

毛沢東の非情な戦術（長春城包囲戦の惨状）

毛沢東の最大の武器は、冷酷非情さにある。例えば、国共内戦で共産党軍が勝利しそうになった 1948 年、共産軍による長春城包囲作戦が展開されていた。毛沢東は、国民党軍だけでなく市民まるごと城に閉じこめて、兵糧攻め作戦をとった。そうすることにより、国民党軍が市民の惨状に耐えかねて容易に降伏すると考えたのである。

毛沢東の予測どおり城内の市民から多くの餓死者がでて、市民は城外に出してくれと必死に哀願するも、毛沢東はそれを許さなかったことが被害をいっそう酷くしたのだ。

この惨状を見た人民解放軍（共産党軍）の老兵士は、涙を流していった。

「オレたちは貧しい者のために戦っていたはずじゃないのか？　それなのに、ここに転がっている死人のいったい何人が金持ちだというのか？　この中のだれが国民党員だというのか？　みな貧しい人たちばかりじゃないのか」

この長春城包囲作戦では５ヵ月間で、市民は 50 万人から 17 万人に激減した。死者の数は 33 万人となり、この数は日本軍による「南京大虐殺」の死者数（政府公式発表：30 万人以上）に匹敵する（注）。ただし、長春城包囲作戦の公式発表によると、餓死者は 12 万人とのことだ。

（森野注）それにしても多くの無垢の市民を意図的に巻き添えにしても恥じない毛沢東とは人民の味方といえるのだろうか？　もうひとつこの本で伝えるところで興味深いことは、「毛沢東が南京大虐殺」のことをまったく話題にしたことがないということである。これを知ったら、日本の右翼は「そら見ろ、毛沢東ですら問題にしていないくらいだから、虐殺事件なんて無かったのだ」と言って喜ぶかもしれない。しかし、別の見方をすれば、毛沢東は大躍進時代に、数千万人の人民を餓死させても平気なのだから、二、三十万人の死なんて取るに足らないことだと思っているのではないだろうか？

共産中国でただひとりの百万長者

1953 年には、毛沢東は人民を脅して国庫に手をつけないようにさせるという目標を達成していた。その結果、たしかに共産党の官僚社会ではそれまで問題にされてきた収賄のような腐敗は少なくなった。ただし、共産党の役人は特権的な生活を保障されていた。

毛沢東自身は、スイスの銀行に私財を蓄えるといった二流独裁者なみの横領には手を染めなかった。しかし、それは単に、失脚に備える必要がなかったからだ。毛沢東はそのような事態が絶対に起こらないように周到に手を打っていた。毛沢東は横領というよりむしろ国庫を自分の財布として扱い、人民のニーズなど無視して自分の使いたいように金を使った。個人的なライフスタイルに関しては、毛沢東は王侯貴族のような奢侈を好み、国家に多大な経済的負担をかけてもそれを追求した。毛沢東のそういった腐った行状は、中国を征服した直後から見られた。彼はどこに住んでいるのかを含めて、生活実態を知る人間はほんの一握りしかいなかった。近くで見ても、毛沢東は一見して贅沢な暮らしをしているようには見えなかった。

毛沢東は身なりを飾り立てることに興味がなかったが、欲望を慎んでいたわけではない。毛沢東は別荘が好きだった。全国に 50 を優に越える数の別荘が毛沢東のために作られた。これらの大半が景勝地の中でも一等地を選んで作られた。そして、安全のために、たとえば北京郊外の玉泉山の一山、あるいは杭州の西湖のかなりの部分が立ち入り禁止とされた。毛沢東は水泳が好きだったので、彼専用のプールが作られた。毛沢東が思い立ったときに泳げるようにプールの水をいつも温めておくには、莫大な費用がかかった。美食家の毛沢東は全国から好物を運ばせた。

指導者が別荘などの贅沢を楽しむことは、さほど理不尽なことではない。しかし、毛沢東は国の資産を横領した人間を処刑する一方で、自分はその何倍もの金を使って快楽を追求していた。毛沢東ほど自分の欲望を際限なく追求する一方で人民の欲望を徹底的に否定した矛盾だらけの支配者は、ほかに例を見ない。毛沢東は厳重に秘密が守られている環境で「性」のきまぐれを存分に追求していた。1953 年に軍に対して文工団の中から若い女性を選んで中央警衛団の特別隊を作るように、命令が出された（注）。歌い手や踊り手のほかに、別荘に待機する看護婦や女中も精選され、毛沢東はその中からセックスの相手に好きな女性を選ぶことができた。軍の責任者彭徳懐はこれを「選妃」と呼んで毛沢東を批判したために後に毛沢東から報復を受けた。

（森野注）北朝鮮の歌舞団も同様の趣旨で作られたが、それは毛沢東の前例に倣ったからなのだろうか？　毛沢東がこのような女狂いであったことが人民に知られたら、彼の神話は一挙に崩れ落ちることだろう。徹底した報道規制をして人民に知らせず、そして偽りの共産党史を人民に教育しているために毛沢東は今でも神様のように慕われているのだろうか。

【下巻】

飢饉

毛沢東は軍事力を高めるためにソ連からの援助を要請したが、それと引きかえに、彼の支配地域が産した食糧で支払うことにした。その結果、共産党の支配地域で飢饉がおこった。毛沢東は

飢饉が戦争のせいいだと嘘をついた。後年、「大躍進」時代に本格化する深刻な食糧不足による餓死の予兆が国共の内戦時（1946 年頃）からすでに始まっていた。

毛沢東と劉少奇の確執

毛沢東が劉少奇を徹底的に虐待して失脚させたのは、かの有名な文化大革命のときであった。しかし、二人の対立はそれより早く革命成立（1949 年）後から始まっていた。毛沢東は革命直後から中国を軍事大国化するために、ソ連のスターリンを頼って軍備増強策を推し進めた。しかし、ソ連からの武器供与に対する支払いを農産物で賄った。そのために、農民の困窮が深刻になり劉少奇は見かねて毛の方針に反対した。それを怒った毛沢東は劉をさんざん脅し、失脚は時間の問題と見られていた。

劉少奇

大躍進――国民の半数が死のうとも

中国人民は政府の曖昧な表現によって、大躍進の目標は中国が「比較的短期間ですべての資本主義国を追い越して世界で最も豊かで先進的で強力な国家の一つになることだ」と聞かされていた。

軍備増強・原子爆弾の製造による超大国計画は、農産物の輸出によって国民を苦しめたが、同時に大量の鉄鋼を必要とした。ノルマ達成のため能力の劣る溶鉱炉（土法高炉）で生産された粗鋼は、悪質で使い物にならず大変な無駄になってしまった。さらに溶鉱炉で燃やすために大量の木材が斬り出されたので、山は禿げ山となり後々洪水で苦しむことになった。

こうして、毛沢東の夢を打ち砕く結果になった。四年間の「大躍進」は資源と労力の途方もない無駄遣いだった。これほど大規模な浪費は世界の歴史にも例がない、とこの本は手厳しい。

通常、「大躍進」では鉄の生産などの工業化と人民公社による集団農場のふたつの面が重要だとされているが、この本では人民公社の問題についてはあまり触れられていない。

彭徳懐の孤独な戦い

大躍進の最初の二年間は、政治局員メンバーの大多数が毛沢東の方針に従った（注）。しかし、ただ一人、国防部長（大臣）の彭徳懐元帥だけは異議を唱える気骨を持っていた。

（森野注）周恩来はこのときだけでなく、文化大革命の間も毛沢東の方針に忠実だった。彼は外交などで中国の顔となって、欧米の政治家の受けがよかった（日本でも、中国の民衆にも人気がある）。しかし、彼が長い間失脚することもなく高官の地位を保つことができたのはなぜだろうか？　彼が毛沢東に対して絶対的イエスマンだったのか（隠微な形での齟齬はあったが）、政治権力がうごめく中で遊泳術が巧みだったのか？　彼は結局、劉少奇や彭徳懐だけでなく、林彪ま

でが失脚する中で、最後まで権力の中枢にいられたのはなぜだろうか？　政治家としての周恩来について改めて調べておく必要があると感じた。

彭德懐は、赤貧の農民だった自分のルーツを忘れなかった。後年毛沢東によって投獄されたあと、獄中でまとめた自伝で、飢えに苦しんだ子供時代のことをたびたび思い出して「堕落してはいけない、貧しい人々の暮らしを忘れてはいけない」と肝に銘じていた、と書いている。1950 年代には、中国全土に別荘を作らせたり次々に愛人を調達（彭德懐の言葉で「選妃」）させたりした毛沢東の堕落した生活ぶりを、彭德懐だけは歯に衣着せず批判した。

以前から、彭德懐はたびたび毛沢東と激論を戦わせてきた。1930 年代には、他の軍司令官に対する毛沢東のやり方が悪辣であると批判した。長征においては、毛沢東が利己的な目的のために紅軍を崩壊寸前まで引きずり回したことに怒って、毛沢東から軍事指揮権を取り上げようとしたこともあった。1940 年代（延安で）、毛沢東が整風運動のあいだに個人崇拝を進めようとしたとき、彭德懐は「毛主席万歳！」の唱和を拒み、毛沢東賛歌「東方紅」を歌うことも拒んだ。

当然、彭德懐のこうした言動に毛沢東は腹を立てたし、「平時の軍事支出が人民の生活水準に見合ったレベルでなくてはならない」と毛沢東を批判したことにも苦々しく思っていた。彭德懐はしばしば独自の、共産党員らしからぬ発言をした。たとえば、「自由、平等、博愛」といった概念をおおっぴらに賞賛した。毛沢東はこの概念を「反マルクス主義的」だと批判した。彭德懐はまた、「法の下には王子も庶民も平等だ」、「己の欲せざる所、人に施すこと勿れ」といった中国の伝統的な道徳観を守るべきだと主張した。毛沢東は、「わたしの主義はこれと正反対で、己の欲せざる所まさに人に施すべし、だ」と言っていた。

1958 年の大躍進開始と同時に、毛沢東は腹心の林彪元帥を党の副主席に昇格させたので、彭德懐は党の序列で林彪の下になった。

大躍進が進むうちに彭德懐は恐るべき事態になっていることを知った。

毛沢東が途方もなく大規模な攻撃用戦力の増強を目指しており、それをソ連のフルチョフ書記長（スターリン亡きあとのソ連指導者）に協力させようと圧力をかけるために、金門島・馬祖島（注）への砲撃をして危機感を煽った。

（森野注）共に台湾領（馬祖島は右図より東北方面にはずれている）。江西師範大時代に厦門へ旅行したときに、遊覧船で航行中に金門島を見た。島の中腹に国民党孫文のスローガン「三民主義」の看板が掲げられていたことを思い出す。金門島が厦門市の目と鼻の先の近距離にあり、台湾からは遙かに離れているのに台湾領であることに私は驚いた。だが、小島ながら分厚い鋼鉄で固められた金門島など中国軍が砲撃してもびくともしないと言われている。しかし、毛沢東の意図は、そこまでして台湾と戦う意欲を見せることにより、実はその背後にあるアメリカとも戦うことになり、そのためには中国に原子爆弾開発の必要性があることをフルシチョフに説得することにあった、とこの本は書いている。

そして、ソ連からの先端兵器供与への支払いに充てるため、毛沢東はこれまでよりはるかに多くの食糧を農民から搾り上げようとしたのだった（注）。

（森野注）誕生間もない自国を軍事大国にして揺るぎない国際的地位を固めようとする毛沢東の積極策によるものではあるが、その代償として人民を飢えさせてもいいのだろうかとの大きな疑問があるのだ。だから、「平時の軍事支出が人民の生活水準に見合ったレベルでなくてはならない」とする彭徳懐や「過度に人民を飢えさせることには反対である」とする劉少奇や周恩来は、毛沢東と意見の対立があった。

歴上の人物を①何を為したか、②その人となり（人間性）、の二点から評価してみよう。革命家毛沢東は偉大な共産主義国家を打ち立てたのだから、成し得た成果に関しては申し分ないだろう。しかし、彼の人間性はとても好きになれない。ただし、そもそも革命家にヒューマニストであることを期待しても仕方がないのかもしれない。旧体制という巨悪に立ち向かうためには革命家もそれに負けないほど精神的にタフで悪辣さがなければならない。単なるお人好しでは務まらないのだろう。彭徳懐のように毛沢東より遙かに民衆への思いやりのある人間性豊かな人物は、結局、大事を成し得ない人であり、毛沢東につぶされてしまうのだろう。

その後、彭徳懐は各地を視察した。河南省でも彭の故郷湖南省でも農民が餓死しかけており、悪質な粗鋼しか生産できない土法高炉が林立しているのがわかった。彭徳懐は経済政策担当の薄一波（注）に会い、毛沢東の穀物の非現実的収量に基づく穀物収穫政策の誤りを、一緒になって毛沢東に糾そうと提案したが断られた。結局、彭徳懐はひとりで毛に伝えた。これによって、彭は 1959 年に江西省廬山で開かれた幹部会で毛沢東によって粛清された。

（森野注）薄一波はその後、副首相や常任政治局員まで上り詰めた。先のリポートで紹介したように、「遺言」で毛沢東の政治の誤りを指摘したが、当時の彭徳懐の呼びかけには自己保身のために断ったのだ。また、重慶市の書記だった彼の息子・薄熙来は汚職などで裁判にかけられて有罪となり政治的に失脚したことは最近のホットな話題であった。

劉少奇の奇襲

ナンバー２の劉少奇は毛沢東の方針に順い、廬山会議で粛清された彭徳懐を擁護しなかった。しかし、1961 年に 3,000 万人も餓死したことに深く憂慮していた。そして、彼は故郷の湖南省で「同郷のみなさんがこれほど過酷な暮らしをしているのを見て、わたしはショックをうけました。‥‥みなさんにこれほどの苦しみを与えてしまったことに責任を感じます、謝らなければなりません‥‥」と話しながら泣き出し、村人に頭を下げた。

1961 年に開催の廬山での食糧に関する会議で、彼は食糧供出の緩和を主張し、他の最高幹部の同意も得た。だから、毛沢東も順わざるをえなかった。この結果 1961 年の餓死者は前年の半分に減った（それでも 1,200 万人もの餓死者であった）。1962 年には劉少奇の更に開放的政策によって、彭徳懐の粛清にともなって処分された人々を復権させた。芸術や文学の分野でも作品の発表が相次いだ。

しかしそれは、毛沢東の激しい怒りとなって沸々と煮えたぎり、後年の文化大革命ではついに劉少奇は走資派として毛沢東の復讐に遭うことになった。

文化大革命（1965～1976）

1965 年 11 月、毛沢東はついに長年にわたって計画してきた大粛清に乗り出した。毛沢東はまず最初の一撃を文化に向けた。この大粛清につけられた文化大革命という名は、ここに由来する。攻撃の先頭に立ったのは毛沢東夫人「江青」である。彼女は迫害嗜好の偏執狂だったので、彼女の文化部の方針に従わない職員に情け容赦のない迫害を始めた。また、林彪は毛沢東に 40 年近く忠節を誓っており、文化大革命の立役者になっていた。国防部長に就任した林彪は毛沢東のイメージアップのために **「毛沢東語録」** を発案しこれを人民教化策に利用した。

毛沢東語録を掲げる紅衛兵

文化大革命のきっかけとして有名な話は、「海瑞罷官」（海瑞免官）という明代の清官海瑞が悪政に苦しむ農民のために皇帝に諫言して免官・流罪になったという伝統的筋書きをもとにした劇である。毛沢東はこの作品を、元国防部長彭徳懐を粛清した自分を暗に攻撃したものであるとして非難し、彭徳懐元帥とともにこの作品を批判するよう命じた。毛沢東の意を受けて姚文元が執筆した論文「『海瑞罷官』を評する」が 1965 年の上海紙に掲載されたことから文革が本格化する。

無錫にいたときに杭州旅行中にたまたま立ち寄った海瑞祠

恐怖のつるし上げ（批闘会）

毛沢東は政府の高級幹部に、子供たちの紅衛兵を組織するように勧めた。

父親や友人から毛沢東が暴力を奨励していると聞かされた紅衛兵は、たちまち残虐行為に走った。8 月 5 日、高級幹部子弟が通う北京の女子中学校（日本の高校）で、初めて拷問死が起こったとされる。この学校の校長は 50 歳で四人の子を持つ母親だったが、女学生たちに蹴られ、踏みつけられ、熱湯を浴びせられ、重いレンガを運んで往復する作業を命じられた。よろめきながらレンガを運ぶ校長を、女学生たちは真鍮のバックルのついたベルトで鞭打ち、釘の出た木の棒で打ちすえた。校長はまもなく衰弱し、死亡した。事後に、学生のリーダーたちは新設された北京市の文革当局に事態を報告した。これに対して、活動を中止せよという指示はなかった。つまり、続けよということだった（注）。

（森野注）私には、なぜまだ子供の女生徒が校長にこのような酷い目に遭わすことができるのかが分からない。おそらく、女生徒にしてみれば、神様毛沢東の言いつけならなんでも素直に順うべきだ、と考えているのだろうし、群集心理が働いているのかもしれないが‥‥。

学校を恐怖の嵐に巻き込んだあと、毛沢東は紅衛兵を一般社会に向けて解き放った。毛沢東と並んで林彪が天安門に立ち、全国の江衛兵に「旧文化‥‥‥を破壊せよ」と呼びかけた。若者たちは、まず最初に伝統的な店の看板や街路の名前を標的した。次に、長い髪、スカート、かかとの高い靴の人を攻撃した。

つぎに、北京作家協会の中庭に押しかけ、中国で有名な作家二十数人を分厚いベルトで打ち据えた。作家たちは屈辱的な文字の書かれた大きな木札を細い針金で首にかけられ、焼けつくような太陽の下に立たされて鞭打たれた。更に、中国を代表する作家や京劇俳優など三十人の芸術家が焚き火の前にひざまずかされ、ふたたび殴る蹴るの暴行を受け、棒や真鍮のバックルがついたベルトで打ち据えられた。政府から「人民芸術家」の称号を授与された 69 歳の「老舎」もおり、翌日、湖に入水自殺した。

恐怖をさらに深く個々の家庭にまで行き渡らせるために、毛沢東は紅衛兵に市民の自宅を襲撃させ、暴力的な家探しを実行させた。襲うべき家は国が選び、名前と住所を紅衛兵に渡した。これらのことは毛沢東の命令がなければ独断ではできないことである。

公安部長もこうした情報を紅衛兵に流すように部下に命じた。部下が、「もし紅衛兵たちが押し入った家の人たちを殺したらどうするのですか？」と質問が出たらしく、公安部長は「殴り殺されるなら殴り殺されるままにしておけ、我々の関知するところではない」と答えている（注）。

（森野注）取り締まるべき治安の責任者がこれだから、町は紅衛兵が跳梁跋扈する無法地帯なっている。

家探しを受けた被害家族の中には、農村へ追放されるケースもあった。毛沢東が以前から進めていた都市を「純粋な」工業中心地にするプロセスをいっそう促進するためだ。北京では、８月末から１ヵ月たらずのあいだに 10 万近い人々が農村へ追放された。

中国文明そのものともいえる孔子を祀った孔廟を打ち壊すように命じたのは毛沢東の指揮下にある部署だった。山東省曲阜市にある孔廟は、歴代皇帝や芸術家がこの地を詣で、記念碑を制作させたり作品を寄贈したりしてきたため、貴重な文物を収めた博物館となっていた。破壊命令をうけた地元の人々はわざとのろのろと進めていたが、北京から紅衛兵が派遣され「毛沢東思想の不倶戴天の敵」と叫んで破壊行為を始めた（注）。

（森野注）かくして毛沢東の追求はいよいよ本丸に進むことになる（以下はこの本に基づく私の感想）。

劉少奇と彭徳懐への制裁は言語に絶するものがあり、民衆からのお仕置きの写真が下にある。

これらはすべて毛沢東の指示によって為されたものであるが、復讐に燃える悪鬼の仕業としか思えない。いやしくも文明国の政治家がある志のもとに行った政治活動とはとても思えないのだ。

ジェット式：首を前につきだして、両腕を後ろに引く形がジェット機に似ているのでこの名前がついた。彭徳懐のような人物ですら例外ではなく、無知な民衆からこのようなお仕置きを受けた。
劉少奇の妻はこのような屈辱にも耐えて毅然とした態度を崩さなかったと言われている。

私は昔読んだことのある本を思い出した。それはフランクルの「夜と霧」だったろうか？――記憶がさだかではない。

たしか、ゲシュタポの迫害に遭ったユダヤ人たちの悲劇が描かれていたように思う。
強制収容所（だったか？）でゲシュタポの管理下で命が危うい危機的な状況にあっても、必死に人間の良心・尊厳を失うまいとするユダヤ人がいる一方で、少しでも身の安全を願ってゲシュタポに迎合して仲間を裏切るユダヤ人もいた。そんな姿は日本の学校にあるイジメ現象の中にもみられる。悪ガキにイジメを受けている子を眺めている多くの取り巻きは、イジメられっ子がかわ

いそうだとは思っても悪ガキを咎めると、今度は自分がイジメのターゲットになるのを恐れるあまり、イジメに荷担する側にまわってしまうのである。そこには人間の弱さや悲しみがある。

文化大革命で政敵に恨みを晴らそうとする毛沢東は、相手を恐怖に陥れ、屈辱の無念な思いを骨の髄までなめさせようとており、それは、ゲシュタポや強制収容所の署長と何ら変わるものではない、と私は思う。私は断片的な知識から、毛沢東を「創業に大功のある英雄だが、守成には無能で権力ばかり振り回すヤクザ者」だと酷評したことがある。だが、「マオ――誰も知らなかった毛沢東――」を読んでからは、いっそう毛沢東を嫌悪するようになった。

だが、待てよ、とも私は思うのだ。

いやしくも革命の大業を成し遂げたほどの男が渡世人の苦界で蠢いている人間と何ら変わりないとは思いたくない。この本が毛沢東に対して意図的に悪意ある記述をしてはいないか？　そんな疑問も湧いてくるのだ。毛沢東は文化大革命を通じて、単なる卑劣な復讐の鬼だけではなく、この本に書かれていないが共産主義革命家としての別の貌があるのではないか？　そんな所を求めて、図書館で文化大革命に関する本を探してみた。キーワードに「文化大革命」を打ち込むと検索にかかる本はかなりあった。しかし、それらの多くはもう図書館利用者には無用の過去の遺物らしい。図書館の所員に頼んで書庫から取り出してもらったかび臭い本がたくさんあった。

こうして探し当てた本のひとつに「中華人民共和国史」（天児慧著　岩波書店）があった。1999年出版だからそれほど古くはない。ここからしばらく、この本を頼りに文化大革命を実行した毛沢東と彼の時代背景を紹介する。

革命に成功後「どの国のプロレタリアートと共産党も革命の準備を少しでもゆるめることはできない」「米国をはじめとするすべての反動派は張り子の虎である」、「15年でアメリカを追い越す」といったソ連首相のフルシチョフの向こうを張って「（大躍進時代に資本主義国第二位の）英国の工業生産を15年で追い越す」

と、怪気炎を上げている毛沢東の人柄について、まずこの本の記述を要約する。

――毛は少年期より自我の強い性格で、青年期以降は社会と深く関わることによって自我は強い信念に変わった。毛が国家の最高指導者となる中で、彼の強い自我は中国の民族的自尊心の回復、世界で注目され賞賛される中国を建設するという信任に昇華されていったのである。

彼は同時に生来、既存の強い権威に対する反逆児であった。父親に対する反逆は有名であるが、さらには既存の教育の権威、マルクス主義の教義に依存する権威などにことごとく反逆している。彼の権威への反逆は最後には世界支配の権威（米ソ超大国）に反逆するところまで行きついた。その意味で常に現状を打破しようとする革命家であったといえるだろう。

しかし、彼自身が権威を持つことは皮肉にも否定しなかった。毛沢東思想を高く掲げ、個人崇拝をあおることを認めた。最大の権威者になりながら他の権威に反逆するという矛盾した毛のイヘイビアが、毛を建国以来独裁的な革命者にし、かつ悲劇を大きくした要因の一つであった。敵

に対する勝利のためには味方の犠牲を少しもためらわないほどの冷酷さ、非情さを持っていた。しかし建設者としては彼の思考は大躍進に見られるごとく性急であり、緻密さに欠けていた。

年老いて行く中で彼の未来社会像は、ますます現実の問題から遊離し単純化した理念となっている。毛が近代化建設に次第に不熱心になっていったのは、彼のこうした思考的欠陥と関連しているかも知れない。時代がまさに革命期にある時には、毛の欠陥はそれほど表面化せず、彼の長所がフルに発揮された。しかし、建設の時代に入ってこの欠陥は深刻な問題となった。しかも指導体制の中に、こうした欠陥をチェックするメカニズムがなかったため、しばしば毛の暴走、熾烈な権力闘争を生み出すことになったのである（注）。

（森野注）この毛沢東の人柄に基づいて文化大革命を論じるときに、私は中国国内問題だけでなく、国際問題も大きく関わっているように思う。天児の「中華人民共和国史」からそれに関わる部分を抜粋して記述する。

「マオ――誰も知らなかった毛沢東――」のこれまでの記述にあるように、中国共産党そして毛沢東は、クレムリンのスターリンの援助と指導によって成長してきた。その大きな影響を与えたスターリンが1953年に死亡して、後継者フルシチョフが権力を握った。1956年に、彼は個人崇拝をしたという理由でスターリン批判を展開した。しかし、毛沢東はスターリンが国際的共産主義の発展に寄与した実績を高く評価し（その部分が70%）、個人崇拝の非は少ない（その部分が30%）と主張した（つまり「功績7誤り3」）。加えて、毛沢東は自分も国内で個人崇拝を受けているので、フルシチョフの非難は自分自身へも向けられた非難とも受け止めて不快感を抱いたのだ。

1950年代末の国際関係――対ソ連・対アメリカ・対インド――は、中国にとって悪化していた。

フルシチョフはアイゼンハワー米大統領との間で平和共存の歴史的米ソ会談をした。これが中ソ関係の亀裂を決定的にしたのだ。毛沢東の共産主義者としての信念では、帝国主義と共産主義は決して平和共存できない。第三次世界大戦が起ころうとも、そして人類の半分が死滅しようとも、最後に共産主義が勝利するのだ。それなのにその覚悟の無いフルシチョフは修正主義者である、と毛は怒った。

インドとの関係では、チベット侵攻により亡命したダライ・ラマをインド政府が受け入れたことから中印関係が悪化した。そして、軍事衝突したとき、ソ連は「中立の立場」を守り、同盟国のはずの中国の味方をしなかった。こうして、中ソ関係が更に悪化し、フルシチョフは中国への国防技術援助を破棄し、多くのソ連技術者を中国から撤退させた。

1960年代に入っても、中印紛争はつづいた。そして、キューバ危機ではフルシチョフはミサイルのキューバ配備を断念した。これは米国帝国主義への屈服だと毛沢東は感じた。さらに米ソ英による部分的核兵器実験停止条例への調印とつづいた。このような国際的インパクトによって毛沢東は孤立感、危機意識を抱かざるをえず、今後「ソ連モデル」や「向ソ一辺倒」から離脱し、独自の路線を歩もうとした。そのような流れの中から米ソの核支配に対抗し自力で初の原子爆弾実験に成功し、次に65年には水素爆弾実験にも成功し国防に自信を抱くことになった。

こうして毛沢東には国内問題が国際的危機意識とセットになっており、文化大革命が単なる国内の権力闘争にとどまらず、国際社会の変革と強く結びついているのだ。

毛はこう決意した。

「党・政府・軍と各文化界に紛れ込んだブルジョア階級の代表分子、反革命修正主義分子、フルシチョフの類の分子と生きるか死ぬかの闘争をしよう」

そこで毛沢東は一方で林彪の連携に力を得て、手始めに「海瑞免官」問題から劉少奇＆鄧小平一派を追い詰めることになる。

1956 年の共産党全人代で劉少奇と鄧小平一派は個人崇拝を廃して集団指導体制の確立を主張した。これに毛は外面的には同意しながらも、彼自身の独裁を脅かすものとして反発した。こうして毛沢東は劉少奇と鄧小平は文化大革命での失脚が約束されたのだ（注）。

（森野注）2013 年の現在に生きている我々にとって、毛沢東の時代はすでに歴史書で扱われるものになっている。その立場から眺めると「キューバ危機回避」や「米ソの歩み寄り」は東西両陣営が紛争を回避して平和共存を目指しているものとして評価されている。だから中国が唯一の正統な共産主義国家であり、戦争で帝国主義を滅亡させなければ真の平和で繁栄した世界にはならないと信じている毛沢東の考えは、独善であり誇大妄想にしか見えない。そもそも共産主義国のほとんどが地上から消滅したし、毛沢東の作った国家ですら今や改革開放政策により資本主義の国になってしまったのだ。共産主義国が資本主義国に負けたことは歴史が証明している事実となった。

だが、とはいえ、勝ち残った現代の資本主義社会が、瑕疵のない理想的社会であるとはとてもいえないだろう。

この一、二年、アメリカの貧しい人々を中心とする市民団体が、デモ行進で訴えている。

「豊かな１%の人々が我が国の富の 99%を占有している」

やや誇張があるとはいえ、オバマ大統領も認めなければならない不公平がアメリカ社会にあることは事実である。

同じことは、毛沢東の後継者が作った現代の中国にもあり、都市と農村、豊かな者と貧しい者との経済格差が異常なほどの広がりを見せている。富裕層がマンションを 3 つも 4 つも持って利殖にうつつを抜かしている一方で、勉強に励み大都市でまじめに働いている我が教え子が住む家すら買えないような現実がまともな社会とは言えないのだ。

このような現代資本主義社会の現実を見るときに、毛沢東が文化大革命で目指したと言われている究極の「夢」「希求する理念」を、天児は彼の著書の中で以下のように述べている。

――それは、当然ソ連型とは違った。過度な中央集権による特権官僚のエリート社会と重工業偏重による工業化社会を毛沢東は望まなかった。彼は、物質的豊かさを否定はしなかったものの、物質的豊かさの追求が、貧者と富者の格差の拡大、精神的堕落につながるのではないかとの危惧が強まっていった。そのため次第に精神的な豊かさの追求と物質的な豊かさの追求が毛沢東の中

でパラレルに存在しにくくなった。精神労働と肉体労働、都市と農村、工業と農業の格差を問題にした「三大差別の撤廃」などもっぱら平等主義が強調されるようになり、やがては物質的豊かさの追求は堕落そのもの、つまり「資本主義の道を歩むもの」といった単純化された考えにとりつかれるようになった。そして経済建設に力を入れようとする官僚も技術者も知識人も「危険な対象」になっていったのである。知識青年に都市を捨て農村に入り知識を持った新農民になろうと呼びかけた「上山下郷運動」（下放ともいう）は「あるべき人間像」への実践の一つであった（注）。こうした社会あるいは人間の想像こそが、共産主義の実現であり、ソ連方式に対抗できるモデル、あるいはフルシチョフに代わる世界革命の指導者毛沢東のオリジナリティであると信じられた。

（森野注）私はここまで読んで、武者小路実篤の「新しい村運動」やキリスト教徒の村おこし運動を連想してしまった。だが、このような小集団の中で博愛主義・人道主義的な同志的横の結びつきで始まった運動は長続きしたり拡大したりすることはめったにない。ましてや、一国家のレベルで無宗教者である共産主義者が描いたピューリタン的理想主義が旨くいくとはとても思えない。もし、著者天児の記述を信ずるなら、毛沢東は大変な＜ロマンチスト＞に思えてくるではないか！　だが、それは、これまでに読んできた毛沢東の卑劣で残虐な所業とはどうしても結びつかないので、私は戸惑ってしまった。

毛沢東の指摘「物質的豊かさの追求が、貧者と富者の格差の拡大、精神的堕落につながるのではないかとの危惧」は、今日的課題ともなっている。毛沢東時代は、決して豊かではなかったが、人々の間に貧富の差が少なかったといえるだろう。そして毛沢東はそのことを望ましいことと考えていたようだ。一方、後年、鄧小平時代に経済を改革開放して資本主義経済化した結果、現在では人民全体が豊かにはなったが、貧富の差が極めて大きくなって、それが貧しい者の不満となり社会を不安定なものにしている。先のリポートで触れたように、重慶市の党書記「薄熙来」が掲げた二つの政策「マフィアの撲滅と腐敗堕落した高級官僚の一掃」と「唱紅（チャンホン）（毛沢東の礼賛ソングを歌う）」は市民だけでなく他省の人民からも強い指示をうけた。経済的繁栄の中で貧富の差があまりにも大きくなりすぎて住みにくい社会だと感じる人民が増えており、彼らは、貧富の差が少なくて人々が平等な生活ができた毛沢東時代をノスタルジックに思い出しているのだ。毛沢東が問いかけた「精神的な豊かさと物質的な豊かさ」との選択は今日でも未だ結論がでていない課題のようだ。

毛沢東と文化大革命の関わりについて、天児の「中華人民共和国史」はこのほかにも多くのことを教えてくれるが、これ以上書き連ねても読者を辟易させるだけだろう。たしかに毛沢東は革命家として彼なりの論理があるのだろう。が、毛沢東の人柄について上に書かれているように、彼の冷酷、非情な性格は、文化大革命の中で人間として踏み越えてはならない限度を超えてしまっている、と私には思えてならない。

以上、このリポートでは「マオ――誰も知らなかった毛沢東――」を中心に紹介した。この本の中で、毛沢東の知られざる実態を赤裸々に紹介している。

そのことについて、この本の訳者土屋京子が「後書き」でこう書いている。

――この本の著者の一人は「ワイルド・スワン」の著者である。

とてもショッキングな本である。それも少々の驚きではなく、呆然とするような衝撃だ。「ワイルド・スワン」を読んだときも大きなショックを受けたが、「マオ」の衝撃はその比ではない。毛沢東がそれまで中国共産党によって宣伝されていたような高潔・無謬の指導者でなかったことは、次第に知られるようになってきた。しかし、毛沢東がこれほどまでに残虐で悪辣で自己中心的な暴君だったことは、これまでも誰も書かなかった。

本書には、毛沢東が朱徳や彭徳懐の部隊を乗っ取り、張国燾や項英をわざと死の行軍へ導き、王明に毒を盛り、数千万人の国民を餓死させてまで食糧を輸出してソ連から武器を購入した事実が書かれている。「秋収蜂起」も「濾定橋の決死の渡河」も作り話だった、と書かれているなど、今まで伝えられてきた毛沢東像のみならず、中国近代史の共通認識まで問い直しかねない、ショッキングな暴露の連続なのだ（注）。

（森野注）この本はとても有名でWikipediaでも紹介されています。
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%82%AA_%E8%AA%B0%E3%82%82%E7%9F%A5%E3%82%89%E3%81%AA%E3%81%8B%E3%81%A3%E3%81%9F%E6%AF%9B%E6%B2%A2%E6%9D%B1

それによると、世界25ヶ国で出版され、欧米でも長くベストセラーの1位となり、日本語版も同年11月に出されて以来17万部を超える売上げを示した。同書の取材執筆は『ワイルド・スワン』以後10年以上の歳月をかけて行われ、冷戦時代は困難だったロシアとアルバニア所蔵の公文書、毛沢東と接触した数百人もの中国国内外の人々へのインタビュー、関係各地の調査により新たな毛沢東像を描き出した、とあります。

また、その記述内容についての反響（賞賛と批判）については以下のように記述されている。

『マオ――誰も知らなかった毛沢東』は英国売上高が6か月で単独で60,000部に及んで、ベストセラーになった。研究者と解説者からの反響は、多大な賞賛から厳しい批判に渡っている。

台湾では、国民党が共産党に負けたのは国民党幹部にスパイが多く含まれていたからと論じたことから遺族・関係者が抗議、2006年4月19日に出版予定だったが発売中止になった（注１）。

日本でも反響は大きく、『マオ』は多くの雑誌・新聞の書評でも取り上げられると共に、天児慧（早稲田大学教授；（注２））・国分良成（慶應義塾大学教授）などの現代中国政治研究者からも高い評価が寄せられた。一方でアンドリュー・ネイサン（米・コロンビア大学教授）や、矢吹晋（横浜市立大学名誉教授）などの中国研究者からは『マオ』が発掘してきた「新事実」の論拠の弱さや、毛沢東評価の方法などその内容に対して批判が加えられている。

（森野注１）もちろん中国本土で出版されるはずがない。おそらく、この本が出版されるようになるころには、中国もまともな国として世界に認知されることだろう。
（森野注２）「中華人民共和国史」（天児慧子著　岩波書店　1999 年）として、私が引用した著者である。大躍進では「粗鋼の生産」と「人民公社の成立」の二つが重要な政策と言われているが、後者については「マオ」にはほとんど触れられていない。この点については、下の URL が参考になります。
http://ivanwil.cocolog-nifty.com/ivan/2010/02/post-291f.html